



ひらけることへのこだわり

竹 越 俊 文

いまの北海道では、すでに昼なお暗い天然林に伐採の斧をいれ、開拓の鋏をおろすなどという場所は底をついてしまっている。しかし、入植者の苦勞、成功するまでに味わう辛酸がどんなものであるかは、忘れさられていない。開道初期に鋏をにぎった当主はいなくても、その孫は生きているし、五十年前のことならば二代目が元気でさらに戦後となれば本人がいる。

まず、自分たちの食べるものを作らなければならぬところからはじまり、荒ごなすがすむと開墾地から農地らしくなってきた。集落がまとまり、道ができて橋もかかる。車が通じるようになれば便利になる。そして、店ができると日常生活もぐつと変わる。やがて、市街地も形づくられようというものである。

いままでの北海道に生きた人は、なにかのつながりを開拓者にもってきた。

開墾一筋にがんばってきた人たちは、自分たちの築いた土地が、ただの農村に落ちたとき、「このあたりもすっかり変わったものだ」とつぶやく、感深か氣に、ときにはじまんそうに、ある場合はうんざりした調子もまじえてである。

「ひらけすぎてしまった」ともいう。だが、道も、灯火もないむかしにかえりたいとは誰ものぞまない。なにか、失くしたものをしたような氣がするのであろう。

§

日本列島に住みついたわれわれの先祖については、いろいろの説がある。大陸から半島や島を経て、また、日本海をわたって遠まわりではあるが、南から黒潮に乗ってと、いずれにしろ長い年代にわたって、くりかえしやってきたものであろう。

上陸してみると豊葦原の瑞穂の國は、平野部ときたら川が勝手に流れ、滞り、湿地

にはガマや葦がのび放題だった。そこで川をさかのぼり、高みへ、乾いた土地へ、森林地帯へと安住の地をもとめ、水源地に近い適当な場所をみつけると、防風林や薪炭林をのこして耕地づくりにげんだようである。

長田幹彦が明治末期に北海道の開墾をテーマとして小説を書いているが、昭和期の開墾地と少しも変わらないような氣がする。小説には、開墾地のさらに遠い奥にある湖畔で、ただ一人養魚をしている老人が登場する。

太古の頃にも、集落の仲間に入らず、山の奥へもぐりこんだ変わり者がいたようである。里の人は、彼を自分たちより強い人として感じ、あるいは恐れエビス(夷)と呼んだという。目が光り髪もものび、荒衣をまとった男がつるで梢をからまれ、アーチのようになった下に坐っているから、そこ

へは近寄るなどといういい伝えもあるという。

里人は、水源地の山を大切にしていた。その山でもっとも大きな樹の下に、丸い石を置き、あたりをきれいに石でかこんだ。山全体を絶対禁伐にする、冬至には、赤い鳥がその梢にとまる。その鳥を天狗ともよんで飛来して、太陽の強いエネルギーを梢に伝える。それは幹を伝わって根元の石に移る、里人の代表がきて、石にさわると靈力を受ける。それをさらに里人にわたせる。

冬至が去ると昼が長くなってるので、農業にとっては春の近よりととなる。

丸い石をツクという。裏日本の砂鉄をとるタタラ場では原料をとかして、冷えたかたまりをツクとよんでいる。根性のある人はツクがあるので弱虫はツクなしである。話が横道にそれたが、山の里はだんだん

下へ發展して、平野へと降ってしまふ。大切にした水源地の山は、禁断の地として恐れられて近寄らない。天狗の庭とか、遊び場という秘境めいたいい伝えのところがなる。「原日本考」という著書の中で、福士幸次郎氏はそんなことを述べている。

小栗虫太郎という作家の名をご存じの方も少なくないと思う。「新青年」あたりにも秘境や魔境の小説を書いていた。

主人公がふとしたことで、閉ざされた世界へふみこんでしまふ。そこには、地上にはない石炭紀の植物界があつたり、古代動物がいたりする。北極圏の地下、赤道下の大洋と場所もいろいろある。読者はひきずりこまれてゆく。外国の小説でいえば、ロストワールドの部類である。昨年はネッシー人口が集まり、ネス湖へ調査に入ったアメリカ青年がいた。シベリアにもマンモスが生きているという情報がある。

でも、そのような閉ざされた世界が存在するゆとりは、だんだんなくなるようである。耳よりの話があれば、たちまち観光開発の名で衣をはぎとられてしまふのである。でも、そうした秘境の名に値するところがまったくないわけでもない。意外なところ的存在し、貴重な感じをもたされる。本誌の第二号かに、高橋延清先生が紹介さ

れた有珠岳の旧火口原などはそうである。

薄い煙を吐く大有珠は約七〇〇メートルの標高で、有珠善光寺の奥の院とされる小有珠の間に約二二〇ヘクタールの平地林をかかえている。ロープウェイで昭和新山から上つてお鉢廻りしても、足の下にそんなところがあるとは思えない。逆に登山道を上る人にしても、樹林の道を下つたその中にあるものを想像できない。国有林であり、古くから放牧林となり、七十頭くらいの乳牛が遊んでいる。夜、円陣をかいて眠る牛の群の中で、母ギツネが子ギツネに乳をやっている情景もみられることがあるという。

銀沼という沼があり、その名は、岸辺の葦にかこまれた水面に明月が写ると、小波が立ち、銀色に光ることから、つけられたという。現代の怪物、観光開発が見逃がすはずはない。銀沼の岸にはレストハウスめいたもの、沼にはこぶ白鳥をはなし、丸木船をうかべようという案が出た。国有林としては、もちろんお断わりした。そつとしておこうという次第である。

だが、銀沼はいま銀沼でなくなっている。何年か前にヒツジグサをいれたらば、水面をすっかりふさぎ、月影をくたく小波が消えてしまった。フナを放したら二、三年で大繁殖し、つり堀みたになつた。あ

る高校生が水運をもつてきて、花を咲かせたら、盗採をする不心得者があらわれた。これを人工による変化といえるかどうかはべつとして、汚染されていなかった証となるであろう。

現在つかいながれている「開発」ということばは、戦後生まれたとなにかのつていた。自然改造という文字どおり、大規模な事業もソ連では行なわれているという。

近頃の開拓や開墾は、機械力を利用し、人力や畜力にはたよらない。伐採した樹木の根株までひっこぬいてしまふ。凸凹はたちまちなくなり、一番先に道路ができて、車がどこまでも入る。山から市街地に変わる魔法使いたいなことでも、いまではできる。

緑地帯を残すよりも、一度整地してあとから作るとか、表土はきれいにむいてしまつて、花や野菜を作るためには、また運んでくるほうが経済的ということになる。

筆者は山官生活を三十二年半やった。はじめに教えられたことは、山をよく歩き、自分の目で山をよく見ることであった。したがって、山水風物にふれることには恵まれていた。林道を歩いていると、どんな有名地にも劣らない景観にぶつかる幸運があつた。しかし、いまでは、車を利用するほ

うが多く、歩く必要がなくなつた。山の中でも立派な道がひらけているからである。そういう道を歩いても、あまり愉快ではない。舗装でもしてあつたらば、ますます足もとの感じがよくない。それよりも、車で目的地へ直行したほうがよさそうだしということになる。目をとじていても、車は点から点へと運んでくれる。

小倉百人一首の中には恋歌も多いが、自然を樂しむ歌が多い。あの時代でも、歌枕という名所が全国に散らばつていたし、物見遊山ということばがあるように、日本人は物見高かつたばかりでなく、觀賞することが生活の一部だつたようである。紅葉のない観楓会、花のないお花見、バスに乗つてゆくなつかランドのたのしみは、むかしの人にとつては、ふしぎに感じることはないであろうか。

みたくもないからしかたがない。よい景色があれば全開して、誰でもゆけるようにしてくれたという注文にそつて、観光事業が成り立つてくる。

開発、ひらく、ひらけるということば、あけつぷりげることば、手つかずにしておくとか、閉ざされるということばは正反対な意味であれば、設計の前提もなしに、「ひらけすぎた」と、こたわるのもおかしいかもしれない。